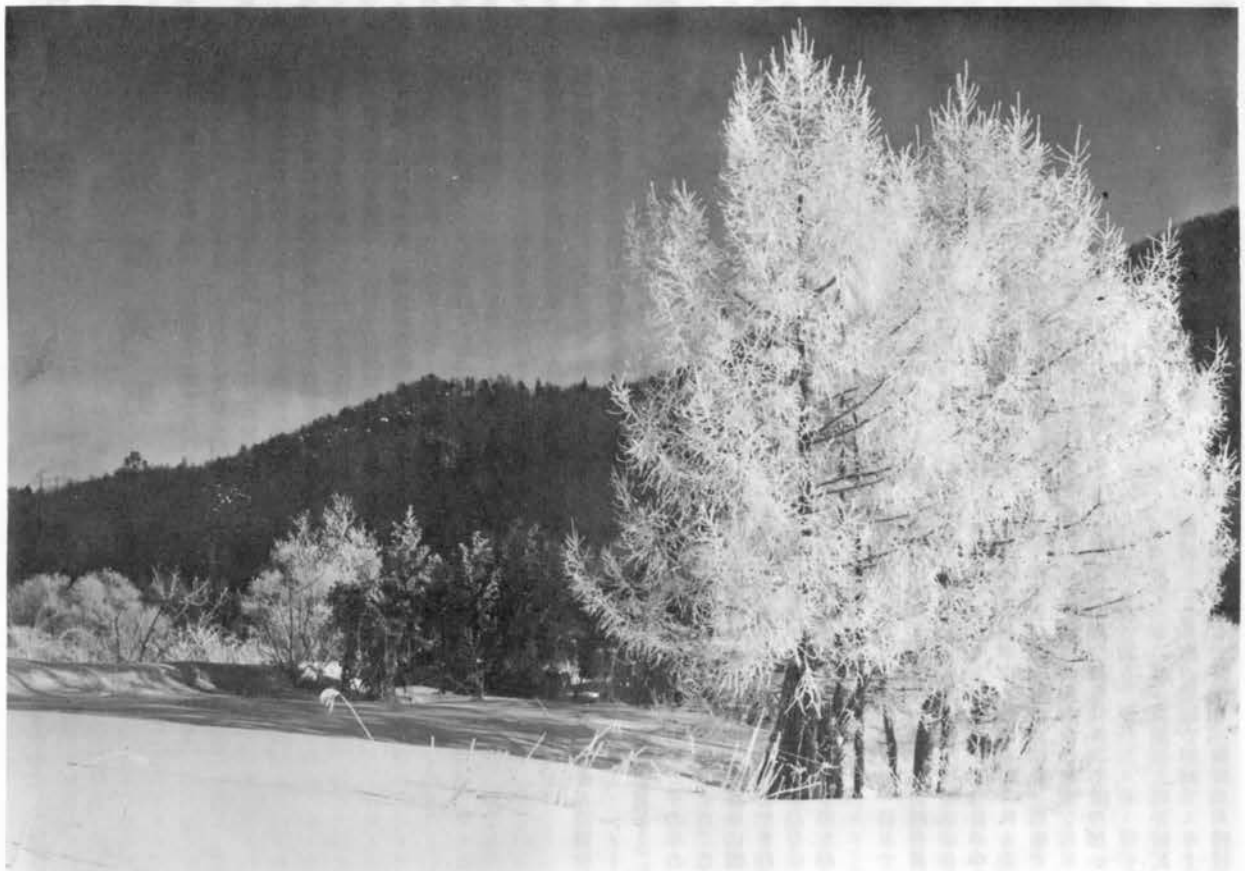


# 山と博物館

第23巻 第2号

1978年2月25日

大町山岳博物館



樹氷(神城にて)

撮影 伊藤則夫

## 季節風

年あけの湖上にクモの子が散ったように釣人たちが氷に穴をあけ、ブルーの水が覗けるそこから公魚(ワカサギ)が一つ二つ三つと鈎掛かりして釣り上げられてくる。

透明なテグス糸の先で銀白色のこの魚は、キラキラと跳る。冬のにぶい光に湖の精が化身となって踊っているのかもしれない。

氷上に投げ出された魚がひと跳ね、ふた跳ねして凍っていく。深々と雪を冠った山々に囲まれ銀白色に凍結した湖を住み家とするにふさわしい美しい魚の終えんである。

今年は暖冬とあって湖の水温が高い故、結氷度が悪くこのような風情が今だに見られない。北国に公魚の仲間が多いのは、もともと北日本にいた魚だからで、日本での南限は太平洋側では霞ヶ浦、日本海側では島根県といわれている。今日でこそ棲名湖、山中湖と公魚の生存域は広汎であるが、昔は霞ヶ浦、八郎潟湖沼など海に通じている塩分を含む湖にしかいなかったという。そして産卵期になると、そこから河口湖に溯った。この魚の移殖が成功した一つは、卵の生活力の強さだった。汽水から次第に馴らし、淡水でも生きるようになった。そして今では淡水でも産卵する。水深が浅く、天然の藻エビやブユの幼虫など動物性の餌が豊富で、低水温、これが公魚の好む生棲条件である。

アマサギ、桜魚、スズミ魚(駿河地方)、しらすぎ(伯耆地方)など公魚は華麗な別名をもっている。繊細な優美な姿から名づけられたものであるが、昔の人々は、この魚への土地の愛情として一入こんな表現にこめてきたのであろう。毎年この季節が訪れると、プラウン管に霞ヶ浦に浮ぶ帆曳網の風景や氷上に手あぶりの暖をたき乍ら家族づれで公魚釣りに一日のレジャーを楽しむ姿が写し出される。氷上をはく烈風に白帆がはためくさま、そして、たそがれの氷上にうづくまり凍りつく釣り糸をたぐる風情に凜烈をおぼえないわけにはいかない。そして、いつまでも北国の風景として是非残しておきたいものである。

(大町市釣クラブ協議会長 奥原悦二)

# 大町におけるスキーの発達

赤羽 英男



大町スキー場表山全景

大町周辺におけるスキー発祥の歴史は県内でも一番古い部に属している。それは、此の地域に時代を先取りした良い指導者がいたことによる。

また大町でスキーを語るには山岳、登山とのかかわり合いを忘れることはできない。日本山岳登山の黎明期、明治二十六年今は上高地と共に有名なウオルターウエストンが針ノ木岳登山のため長野、信州新町、八坂村左右を経て大町に到着、八日町の対山館(今の石曾根医院)に止宿し針ノ木岳に登り、天下に針ノ木岳を紹介している。この対山館が大町におけるスキー発達の舞台になっている。そして此の対山館主、百瀬慎太郎がスキー導入の先達であり、功労者でもある。

百瀬慎太郎は明治の末期四十二年八月八日、日本山岳会に登録番号二十五号で登録され入会している。同じ明治四十四年一月十二日は高田連隊において、オーストリア武官レルヒ少佐が日本において初めてスキー術を教えたこと有名であるが、その一年前四十二年一月、対山館の三階の一室で、百瀬慎太郎、赤沼千尋(有明村出身、燕岳の燕山荘、大町スキー場スポーツロッヂ等を経営)、伊藤孝一(名古屋出身、伊藤殖産)の三人がスキーについて論じ合った記録が残っている。

この三人が、この大北地区にスキーを広め技術導入の中心的存在になった人達である。明治四十五年は発足したばかりの越信スキークラブ(普通なら信越と呼ぶのを越信と呼ぶ)

だこの辺に当時高田を中心にした関係者の心意気を感じる)を発展的に解消して日本スキー倶楽部を創立し、長野、新潟、秋田、青森に支部を置いた記念すべき年であるが、この年を境に時代は大正に入るのである。

大正二年(一九一二年)以前から度々登山のため大町に来て対山館に止宿した、横浜市に住んでいたロシア人アレキサンドル・グゼーフという小柄な男が百瀬さんのスキー熱を知り自分の持っている本物のスキーを譲り渡す話が出て、当時の金額三円五十銭で商談? 成立、このスキーが松本平で初めて手に入れられた本物第一号であり樺材使用、ビルゲ式、七フイットの代物であった。このスキーを借りて滑るために当時、ろくな交通機関もない松本市からわざわざ大町に来た日銀松本の伊藤英三郎等は日参したと記録され、このスキーで美ヶ原を滑っているのである。

さて、このスキーを百瀬さんは買求めたのであるが初めは七フイット(二・一メートル)という長物足に付ける方法もむずかしく非常に苦労した模様であったが、その年の二月東山乗越(鷹狩山)付近で滑走した。この時以降大町附近におけるスキーは徐々に広まって来るのであるが、当時のこととそれは特に山岳関係者か、よほどの物好きぐらいにしか草深い此の地方では見られなかったのも事実であろう。

大正六年六月、百瀬慎太郎、日本で初めての登山案内人組合を創立、この組合員にこれからの登山には是非スキー術を学ぶ必要性を教えている。そして、この組合員の中から全国の山岳家の中にその名を知られるような山スキー連者、大和由松、桜井一雄等が生れるのである。特に大和由松は独特なスキーで山林を矢の様に荷を背負って滑ったと記録されているのである。

大正十一年二月、百瀬慎太郎等前記三人が発起人となり此の地域で初めてスキー講習会を東山乗越して開催し、講師に八幡村出身営

林署員、和田宗吉(富士山を初めてスキーで下った人)を迎え、受講者の中には、百瀬慎太郎、赤沼千尋、山口勝、伊藤孝一、与口文次郎ほか六名程の人が参加し、直滑降、全制動、半制動、斜滑降、テレマーク、クリスチヤニヤを一本杖で一週間に亘って開催した。このことは、当時としては大変な出来ごとであり画期的なことであった。これらの人々が中心になり、東山はもとより、イヤリ、青木湖畔等、雪が斜面があればどこでも滑りまくっている。

そして、この年の五月には、大島亮吉、早川種三等が立山別山、真砂の大斜面をスキーで滑降しあざやかなシユブールを画くに成長しているのである。

大正十二年は国際スキー連盟がフランス、シャモニーで結成され、この地で第一回冬期スキーオリンピックが開催されている。

その頃、一月十七日針ノ木大沢小屋附近では、百瀬慎太郎、赤沼千尋、伊藤孝一、山案内人等が麓川谷に向ってスキーの練習をし、厳冬二月、針ノ木岳を越え担ぎ上げたスキーで立山滑走した事を新聞は大きく報導した。これにちなんで、大町では毎年六月開催される針ノ木岳の慎太郎祭ではスキーを行うのである。山とスキーは此の辺りから本格化するのであり、大正十三年三月には東京帝国大学スキー山岳部員(山岳スキー部でなくスキー山岳部である)窪田氏は初の立山、針ノ木、をスキーで突破し大町へ下る偉業をなしとげ大きなニュースとして流れる。

大正十四年針ノ木大沢小屋が完成し夏でもスキーをする人がいて、大町の小学校、中学校、女学校の先生達の中にもスキーをする先生が多くなっている。この年の前後、大町を基地とする登山者は益々増加、朝香宮、石川欣一、岡野馨、山田珠樹等の知名人が続々と大町に入っている。

一九二七年、昭和二年九月、時の大町長平林秀吾は「大町案内」と題する小冊子(定価

五十銭)を発行し、大町附近でスキーの出来る場所とスキーの面白さを宣伝している。

この年の十二月大町小学校の先生の中にスキー研究グループが発足し、子供にスキーを教え初め、大町公園の斜面はスキーをする人で賑わい始めた。月の夜、裸外灯をたよりに夜までスキーをする人達が目立つようになる。

十二月三十日針ノ木岳大雪渓で雪崩に巻込まれ今なお登山史上に残る遭難をした早稲田大学山岳部員は十二月二十五日冬期訓練のため大町に着き、対山館に荷を下すと早々に大町公園でスキー訓練をし十二月二十七日には吹雪について近藤リーダー以下十名が大沢小屋に入った。この時の案内人はスキー達者な大和由松であった。遭難時大和は大沢小屋に残留。

昭和四年一月二日正月早々信越新聞主催(大糸タイムスの前身)で第一回少年スキー大会が大町公園三ツ峯神社前で開催され一等は高橋恭雄であった。この頃すでに少年の将来を見通して大会を主催した信越新聞の見識は高く評価されるべきものであろう。

昭和五年この年は大町にとって記念すべき飛躍の年である。百瀬慎太郎、東山乗越(鷹狩山)に「東山スキー場開発」スキー小屋も建て白塩町の佐々木が経営した。

同じ年大町小学校の先生達や町内有志、平林武夫、内山文吾、清水吾郎、平林卓爾、曾根原武士、尾竹正躬、平林茂喜治、手塚順一郎、小原藤吉、赤羽純信、武田泰臣、奥井由雄、宮本晃一、北沢貞二等が主になって小学生まで手に手に鎌をもって、中山(大町スキー場)に集りスキー場造成に力を合せた。同時にスキー場にはスキー専用の小屋の建設が進んだ。内部中央にイロリがあり、そのまわりにはネゴザが敷いてあった。天候の悪い日など煙が室内いっぱいになった。目が真赤になるといふものであったが、当時のスキーヤーにとっては、正にオアシス、経営は、大黒

町の北沢定吉、大治親子に北村登己栄である。更に裏山大学スロープには十五米級のジャンプ台も完成、小さな小学生までこの台を使って盛んに練習をした。

このスキー場は県内でも極く最初の頃完成した本格的なグレンデススキー場である。ここで、名物「トテ馬車(馬車)」の登場をさせなければならぬ。大町から中山まで馬に轡を引かせたもので真ん中に手あぶり火鉢が御するは、六九町の町田という小父さん、子供達が重いスキーをかついで、三日町、イ子坂を水鼻をこすりながらあえぎ、あえぎ登って行く頃こそこのけ、そのけお馬が通るとばかり豆腐屋のラッパをトテトテと吹いて過ぎて行く、そのころの子供は大町、中山間二里(八キロメートル)を歩くものとしていた、ガバチ野郎(ガムシヤラに強い子供)はこのラッパが何んともシヤクの種、そこで近道を早まわり何んとしても中山へは「トテ馬車より先につきたい、これがまずまず子供に脚力を強くして行つた。帰りは必ずスキーを滑って町中を家の前まで帰って来る。交通事情も今のような目まぐるしい困まつた時代とちがひ、古き良き時代であった。

このころの子供のスキーといえば、たいがいは手製か、せいぜい近所の大工が作ったものは上等の部類に入るものであった。

こんな事情の中でもスキー熱は上る一方で、スキー販売専門店が同時に二店も開店する盛況。そして、この二店とも夏は自転車店であった。この雪深く冬の長い大町では自転車屋は商売としてむずかしい、そこで、目先をきかせたというか、時代を先取りしてスキーを売って一度に二店も出現したこの時代、昭和の初め五年のことである。

ここまで書いたものであるから、この二店名も紹介しておこう。オールドスキーヤーの中にはきつと「ああそうであった」と思い出していただけの人もいるであろう。

二店とも九日町であり、一店は「大王」(高橋)、一店は「粟田」自転車、スキー店である。

さて、同じ頃、大町にはスキー製作専門店も出現したのである。一店は九日町一丁目粕谷(大工)、一店は神栄町安達(建具)店であった。この四店がそれぞれ生計をなしたのであるから当時、この地方のスキーの隆盛をうかがい知ることができるといふものである。昭和五年は、大町スキー史にとって、大町スキー倶楽部にとって最も記念すべき年である。

百瀬慎太郎を会長とする大町スキー倶楽部はこの年の十月、対山館に於て設立総会を開催し、会則、パッチを制定(略称OSC)。発足当時の会員は、単に大町在住者のみにとどまらず北安曇一円小谷温泉の山田さん、有明村の赤沼さんも当然のようにこの会員に名をつらねたのである。

これは長野県スキー連盟結成より二年も先のできごとである。

昭和六年一月東山スキー場に拓殖大学、小



新雪の鹿島嶺国際スキー場

秋元隆邦教授を招き、受講者二十数名が参加しスキー講習会を開催している。そして、この年の十二月には、平村野口の青年団が中心になって、高瀬入麓川谷大久保(現在の高瀬ハイランド)にスキー場を開発している。その頃、高瀬入への交通機関は東信電気(現東京電力株式会社)の発電所建設資材などを運搬するために布設した軌道電車が笹平高瀬川第三発電所、大町間を日に何回となく通っていた。

今はその残形はほとんどないが、鹿島川野口橋の上から見ると下流側に一基だけ当時の電車の橋脚が残っている。ついこのことがこの電車について今すこし書き加えると、これは大正末期東信電気株式会社が高瀬川に五つの発電所を建設するため大町駅、仁科町、大黒町、北高橋前、野口を経て笹平に通じたのもので、この時代町中を電車が走つたといふのも県内では画期的なことであり発電所の職員の中にもスキーの上達者が多かった。昭和七年、長野県スキー連盟結成設立総会、当然、大町スキー倶楽部は県連に加盟した。

この記念事業として大町劇場において当時としてはスキーの最先端を行く「スキーの龍児」という題名の映画を上映したところ地元は勿論、白馬、小谷、有明、池田と各村や町から多勢の人が見に来て連日盛況であった。

昭和八年から十六年の間に大町スキー場には今なお有名なスキー指導者がおとずれている。その中でもシユナイダースキー学校での技術を学んだ馬場忠三郎を招いて、講習会を開催した。この頃からスキー術は現代スキーに近づき、大きく変換して行くのであり、この人の功績は大きく評価されなければならぬ。

昭和十二年十二月大町スキー場に三階建の立派なヒュッテが完成した。このヒュッテの施行者は、当時大町商工会議所会頭、相模組社長、相模三蔵であり、設計者は、現東洋紡績大町工場の設計者である東畑精一であり、

この時代としては巨額三千五百円を投じて完成させたものであり、表山大斜面には二十米級ジャンプ台を完成させ、更にサーチライトにより夜間照明をし、ナイタースキーをも可能にしたのであるから当時の隆盛をうかがい知ることが出来る。

美麻村権現山に大滑降コースを完成させるため大町スキークラブ員、美麻村新行の青年団員が毎日出勤して活動したのである。

新設されたスキーヒュッテのロビーの大きな窓から晴れた日、冬の青空に鹿島槍、爺ヶ岳の主峰に雪煙の上るのを望むのは何んとも言えぬものであった。

明けて昭和十三年二月(一九三八年)は、長野県第六回スキー大会である。

大会総裁に時の県知事、大村清一を迎え参与として百瀬慎太郎、片桐知徳、富井英二、福島幸重、平林秀吾、奥村巖、相模三蔵、平林紫郎ほかがあり、大町スキークラブからの選手の中には現白馬村長、横沢祐、現県議、高橋恭雄、寛仁文、千国吾郎、横沢方夫、西正雄、曾根誠、中谷内篤、筒井久雄、堀内真文、奥井由雄、矢口広美、吉沢一三、高橋大治、小林正喜、北沢譲、高橋明の諸氏であり県内各地から今なおスキー界において活躍している有名選手が大町スキー場集り、大町も町を上げて歓迎にわき、大盛況であった。

この年昭和十三年、全日本スキー連盟は、第一回全日本スキー連盟主催の講習会ならびにパツチテレスト実施計画を発表、全国四十箇所の内、長野県内は大町、霧ヶ峯、菅平と決定した。この事実は、大町でスキーをする吾々に取っては大きな栄誉であり、この時のパツチテレスト一級合格者で大町スキークラブ員は平林武夫、奥井由雄、二級上条貞雄、山本勇、丸山彰、筒井久夫であり、全日本から派遣された講師は、各務良幸、岩崎三郎指導員であった。

昭和十四年全日本スキー連盟政策に呼応して国民皆スキーを全国に呼びかけた、このこ



残雪の大町スキー場

あるが、この第一回検定会では全国で十一名の指導員が生れ、此の地方で今なお、第一戦で活躍している平林堅(西山)、西村良一が合格しているのである。

続いて此の年の三月、全日本スキー連盟は第二回指導員検定会を実施し、四十七名が受検し十二名が合格。この中に馬場忠三郎がいる、馬場指導員は大町にとつて忘れられない人である。この人は度々大町に来て近代スキー技術の指導をしてくれた人である。昭和十六年文部省は学校体育にスキーを取り入れ冬期訓練を菅平において実施。大町から丸山彰ほか参加している。

昭和十八年六月、大町における登山、スキーの発祥、発展になくはならない存在であり貢献して来た対山館は旅館業を廃業するのであり、その後は戦時第一線工場昭和電工の工員宿舎となるのである。

昭和十九年大町中学校(現大町高校)も戦技スキー訓練を実施し各種大会に出場するのであるが昭和二十年八月敗戦を迎えたのである。

第二次世界大戦中生活物資に、こと缺く苦難の時代にも大町スキークラブは存続し戦後、北沢利一を会長とし、ますます悪くなる食糧事情を克服し福岡孝行教授を大町に招き大町スキー場において技術講習会を開催するのである。

昭和二十二年平村議会は築場スキー場開発を議決。この年、大町スキークラブ員等々木美貞全日本スキー連盟指導員検定に合格。敗戦に打ちひしがれている部員に勇気を与える(九二号登録)。昭和二十三年一月には第一回中信地区高等学校スキー合宿講習会を開催した。昭和二十三年大町スキー場に伊藤正一スキーハウスを建設。

昭和二十四年第一回大町民スキー大会を実施、南北安曇より選手三百余名が登録しその技を競った。

昭和二十七年相模三蔵、葛温泉にスキー場

開発、同年第一回オール信州スキー大会を大町スキー場にて実施県内各地より選手が参加した、昭和二十九年には大町スキー場に第一号リフト完成、三十年には大町スキー連盟創立、昭和三十二年大町スキーヒュッテを有明村赤沼千尋開設、昭和三十八年鹿島槍国際スキー場開設、昭和四十二年大町温泉郷爺ヶ岳スキー場開設、昭和四十七年青木湖国際スキー場開設、続いてヤナバ国際スキー場が開設され名実ともに大町はスキーのメッカとなっているのである。スキークラブの会長もその後、内山一郎、高橋恭雄、小林恒雄、種山平一と変わるのであり、各種大会や講習会も開催され、三十五年には第一回針ノ木サマースキー大会、三十六年には第一回公認パトロール検定会に山本携挙合格、三十五年第一回少年スキー大会を大町スキー場、三十八年第一回大町市勤労者スキー教室、四十五年第一回大町市親子スキー教室を開催しており今日までこれ等講習会は続いており、選手も宮島久を初めとし山下孝雄、田中稔、沢渡智吉、田原一正、宮沢広人、北原修、等諸外国遠征の選手まで出すまでに成長したのである。

(大町スキークラブ顧問・大町スキー学校理事長)

**博物館だより**

「ご寄付ありがとうございました。」

「山と博物館」協力費

三三〇〇円 奈良県五條市須恵一丁目 一〇ノ四 小川吉則殿

**訂正**

前号P表紙下 栗田：栗田に訂正

山と博物館 第23巻 第2号  
一九七八年二月二十五日発行

発行所 長野県大町市TEL②〇二二  
大町市 岳博物館

印刷所 大町市 大栄タイムス印刷部

定価 年額 八〇〇円(送料共)(切手不可)  
郵便振替口座番号(長野)三三、二九三